# 奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(1)

# About the Tea-related Historical Sites Existing near Nara Saho College Part 1

寺　田　孝　重

TERADA Takashige

奈良の地は日本文化の故郷であり，その一部である茶文化の故郷でもある．本学の学生諸君が普通に通行している場所にも茶文化の事跡が多くあるので順次紹介したい．今回は茶業の事跡として川上郷，手貝郷，茶道の関連地として古市郷，野田郷，一乗院門跡の紹介を行なう．

キーワード：茶の事跡，野田郷，久保権太夫，夷畑，般若寺，一乗院，真敬法親王，古市郷，古市澄胤

Key Words：Tea traces，Noda-gou，Kubo-gondayu，Ebisubata，Hannyaji-Temple，Ichijyoin，Sinkei-hossinnou，Furuichi-gou，Furuichi-choin

## 1．はじめに

本学が位置する奈良市地域は，日本の文化発祥地であり，文化遺跡が多数存在していることは，周知の事実である．しかし，その中に茶道や茶業に関した史跡が，他府県に比べても多く存在することについては，あまり知られていない．

そもそも，奈良県は天平期の聖武天皇による「行茶（ぎょうちゃ）」[注1]や行基による「施茶（せちゃ）」[注2]の伝承に始まり，平安期始めの『日本後記』[注3]にある弘仁六年（815）の嵯峨天皇による日本初の茶植栽勅令の舞台（五畿内）である．一方，茶道の方から見ると侘茶の祖と云われる村田珠光が南都・称名寺の出身であったり，茶道確立の経過を知る資料などが存在しており，こちらの側からも「故郷」と呼べる地域となる．そこで，学生諸君が通学する本学近傍に絞って，これらに関する史跡を紹介して行きたい．

## 2．紹介

### 2－1野田郷と久保権太夫

ＪＲ奈良駅を始点とする本学行きのバスが，県庁の前を通り国立奈良博物館の横を過ぎて，春日大社へ向かう道から分かれて南に曲る交差点（東大寺南大門前）がある．この交差点の東側，東大寺南大門と春日大社の間に広い芝生空間があり,近年は「なら燈花会」[注4]の主な会場となっている．この場所は，幕末以前は野田村と呼ばれ，春日社神官の住居となっていた．春日社神官の居住地は主として２か所あり，野田村が北郷，高畑村が南郷であった．南郷は今も健在で，春日大社の宮司宅などが存在している．一方の北郷は，明治維新期に春日大社の上地（領地の返上）や人員整理などのあおりを受け，さらに，明治13年（1880）の奈良公園設置，大正11年の名勝奈良公園指定により廃村となってしまった．現在の町名では，奈良市春日野町である．

この地に，近世初頭久保権太夫と言う茶人が住んでおり，彼の残した『長闇堂記』[注5]は，茶道完成期の色々な事柄を伝える貴重なものとなっている．久保（野田）権太夫利世は，元亀二年（1571）に春日社の神官の次男に生まれた．近所に侘び茶人がいたことから，その家の手伝いをしながら茶の湯を会得していった．その後，内職として茶の湯に関連した袋師の腕を磨き，鑑

地図１　旧野田郷付近[4)]

地図２　夷畑と般若寺[4)]

賞眼や芸術的才能に恵まれ当代の一流茶人と交流し，特に小堀遠州[注6)]，松花堂昭乗[注7)]と親しく接した．権太夫が建てた茶室に遠州が，鴨長明をもじって長闇堂と命名している．彼の子供も茶の湯をしたらしく，最晩年に今までの思い出や侘び茶人としての心得を書き残した「家伝・遺訓」が茶室の名前から，通称『長闇堂記』と称されている．この中で，彼は天正一五年（1587）の北野大茶湯の見聞記や面識の有ったらしい山上宗二[注8)]の処刑のことなどを具体的に記載し，これが唯一の資料となっている事柄が多い．さらに，侘び茶人としての心得は，名物などを持たない一般庶民がどのように茶の湯を考えていたのかを知る貴重な手かがりとして重要なものである．

バスの車窓からでも，旧野田郷を見るとき，こんな茶人を奈良が輩出していたことを思ってもらいたいものである．

### ２－２ 夷畑般若寺

県庁東の交差点を北上すると，東大寺に沿って転害門の前を通り，奈良坂を登り柳生方面への分岐点に出る．この坂の頂上付近に，最近はコスモスの花で有名になった般若寺がある．この寺は西大寺の有力な末寺で，付近には西大寺を中興したことで著名な鎌倉期の名僧叡尊の弟子で，日本の公衆衛生の祖でもある忍性が建てた北山十八間戸が存在する．忍性[注9)]は西大寺に茶園を開いたとされるほか，金沢（神奈川県）の称名寺にも茶園を作った伝承をもつ人物である．

この丘陵辺りは，鎌倉から室町期における茶の名産地であった．南北朝期に日本の茶産地を紹介した『異制庭訓往来』[注10)]や『遊学往来』[注11)]に，南都・般若寺と大和・室生寺が記述されている．般若寺の名称は特殊なものではないが，西大寺との関係から考えて，この般若寺は，奈良坂上の般若寺に特定して良いと思われる．現在でもこの付近では，道ばたや崖の切り通しの縁などにチャの木が残存している．

また，この近辺は，中世東大寺の有力な荘園である河上荘（現　奈良市川上町）や手掻郷（現　奈良市手貝町）が存在した．台地の下を佐保川の上流部（蛭子川と呼ばれる）が流れ，大仏殿の大屋根が遠望され，北山と総称されているように，奈良の北側に広がる低山地であるが，その一部は東大寺の境内ともなっており，三笠温泉郷などがある．東大寺の応永期（1394～1427）の文書群には，川上の夷畑茶園（現在も川上恵

比寿神社が鎮座している）や手掻茶料足に関係する物が見られ，般若寺から川上や手貝に広がる斜面が全国有数の茶園であったことを物語っている．

この茶園について，歴史地理学の伊藤寿和氏[注12]は，これらの畑が焼き畑農業であった可能性を指摘されており，若草山の山焼きなど，火の管理に習熟した技術集団の存在も考えられ，中世茶業の解析に重要な地域なのである．

### 2－3一乗院と真敬法親王（しんけいほっしんのう）

近鉄奈良駅から，登大路を県庁の方へ坂を登ると直ぐに奈良地方裁判所の前に出る．この裁判所の敷地がかつて，興福寺の門跡を出していた一乗院の跡地である．20年ほど前までは，奈良地方検察庁に面した側に立派な表門が存在していた．この門跡は，一門様と呼ばれ，平安末期から連綿として続いているが，江戸時代の初期に門跡となった人に真敬法親王がある．彼は，後水尾天皇の第14皇子で慶安二年（1649）の生まれであり，寛文五年（1665）に門跡となっているが，茶の湯に堪能で兄に当たる後西天皇の御茶の湯記を書き残している（『後西院御茶之湯記』）[注13]．これは，上皇自身が行った茶の湯の記録として最古のものと考えられており，当時の朝廷や最高貴族がどのような茶の湯を行っていたかを知る上で重要な資料となっている．後西天皇とかれは，当時の朝廷茶道を指導していた常修院宮慈胤法親王の弟子で，お互いに茶道の研鑽をしていたことが伺われる．さらに，真敬法親王は公慶上人が行った東大寺大仏殿の元禄度再興のとき，大仏開眼供養に際して導師を勤めており，墓所も東大寺境内の大仏殿南西に現存する．

かつて南都の骨格を成した一乗院のよすがが，この区画に有っても良いと思われ表門の撤去は惜しまれるものである．

### 2－4古市郷と古市澄胤（ちょういん）

本学が立地している高台は，古市郷と東山中から流れ出る岩井川（本学の北側を流れている）の出口にあたる岩淵寺（この寺は現存しないが，中世は相当な規模を持っていたとされている）を結ぶ線上にあり，本学に隣接している奈良県護国神社は，中世に栄えた古市氏の出城の跡に当たっている．本学の敷地自身も，城郭跡には指定されてはいないが，地形的に考えてこの城の一部になっていたと思われる．古市の名前は，現在の帯解町にあった今市に対してできた名称と言われている．

地図3　一乗院跡地[4]

地図4　古市郷[4]

古市氏はこの古市町の土豪であるが，興福寺の官符衆徒[注14]として，奈良町の警察権を握ると共にこの辺り一帯を支配し，現在の大和郡山市に居た筒井氏や橿原市の十市氏などと対抗していた．15世紀中頃，古市胤栄，澄胤兄弟が出て，勢力を拡大し隣接する北河内

や南山城の政治にも影響を与えた．興福寺門跡であった大乗院経覚[注15]によれば，胤栄は古市で「淋汗茶湯（りんかんのちゃのゆ）」という入浴を伴った大規模な茶会を行ったことが知られている．弟の澄胤は侘び茶の湯の祖といわれる村田珠光の「一の弟子」とされ「心の文」[注16]や「お尋ねの文」[注17]を伝授されている．また，後世の『山上宗二記』[注18]の中でも茶湯名人の一人に挙げられている．

珠光の「心の文」は，千利休が完成させる侘び茶の湯のスタートであり，その理念の第一歩であった．さらに，「お尋ねの文」には茶花は軽く活けることや道具のありよう，主客の心得などに言及しており，やはり侘び茶の湯の原点をなすものである．これら茶道発生上最も重要な事柄が，この古市の地でなされていたことになる．

## 3．おわりに

今回は，野田郷，夷畑，一乗院や古市郷について述べたが，引き続き紹介して行くつもりである．

## 注釈

注１）御読経（みどきょう）などの折，第二日目に僧に配る茶．

注２）茶をほどこすこと．

注３）六国史の一つ．続日本記の後をうけ，桓武天皇(792年）から淳和天皇（833年）に至る史実を記述した編年体の史書．

注４）1999年より毎年８月上旬頃（10日間）に催される奈良公園一体でロウソクの灯りをともすイベント．

注５）『茶道古典全集 第三巻』淡交社（1977）に全文が収録されている．

注６）江戸初期の茶人であり造園家．遠州流茶道の祖．10歳のとき大和郡山城で千利休の点前を実見して茶の湯に関心をもった．

注７）江戸初期の僧侶で書家．堺の生まれで，京都石清水八幡宮滝本坊の住職．和歌や連歌をよみ，茶道をたしなんだ．書道では寛永の三筆の一人とされる．

注８）安土桃山時代の茶人．千利休の弟子．豊臣秀吉の茶頭となるが勘気をこうむり放逐される．利休のとりなしで小田原征伐の際，小田原陣に参向したが，直言して怒りを買い，耳鼻をそがれたうえ殺されたと『長闇堂記』にある．

注９）鎌倉後期の僧．西大寺中興の僧である叡尊の弟子．重病患者の救済施設である北山十八間戸を建てた．また道路の修築や架橋など社会救済事業をおこなった．

注10）南北朝時代に虎関師錬（玄恵という説もあり）によって書かれた往来物．

注11）室町時代初期に玄恵によって書かれた，各月にわたり新年状から歳暮状に至る僧侶の贈答文を収めた往来物．

注12）「中世後期における東大寺領大和国河上荘の焼畑経営と茶の栽培」『日本女子大学紀要文学部』，48，pp.29-47（1999）（参考文献3）

注13）真敬法親王著．『「茶の湯と掛け物3：宸翰」展図録』，茶道資料館（1983）に翻刻・収録されている．

注14）奈良興福寺の衆徒（僧兵）の長．宣下職で官符によって任命される．警察権を持っていた．

注15）室町時代の僧．九条経教の子．法相宗．応永17年奈良興福寺大乗院門跡,33年以降同寺別当を４回つとめる．永享３年大僧正．10年足利義教の命に反して宝寿寺に隠居．文安元年鬼薗山（きおんさん）に築城して筒井順永らとたたかい,敗れて安位寺にのがれた．文明５年79歳で死去．日記に「経覚私要鈔」．（参考文献6）

注16）「此道，第一わろき事ハ，心のかまんかしやう也」で始まる村田珠光が弟子の古市澄胤にあてた文．この一節からはじまるので，この文章は「心の文」，「心の師の文」あるいは「心の一紙」とも呼ばれる．『茶道 茶人篇（一）巻の五』（創元社刊，昭和11年）に写真，『日本思想大系23古代中世芸術論』（岩波書店1973年）に「珠光心の文」として活字文および解説が掲載されている．

注17）茶花について，古市澄胤の質問に珠光が答えた文．

注18）『茶道古典全集　第六巻』淡交社（1977）に全文が収録されている．

## 参考文献

1）山田熊夫：『奈良町風土記』，豊住書店（1976）

2）山田熊夫：『奈良町風土記　続編』，豊住書店

(1979)
3) 伊藤寿和：「中世後期における東大寺領大和国河上荘の焼畑経営と茶の栽培」『日本女子大学紀要文学部』, 48, pp.29-47(1999)
4) Google:「Google map」http://maps.google.co.jp/ (2012/11/22)
5) 日本国語大辞典, Japan Knowledge：「行茶」, http://www.jkn21.com/ (2012-12/13)
6) 日本人名大辞典, Japan Knowledge：「大乗印経覚」, http://www.jkn21.com/ (2012-12-20)